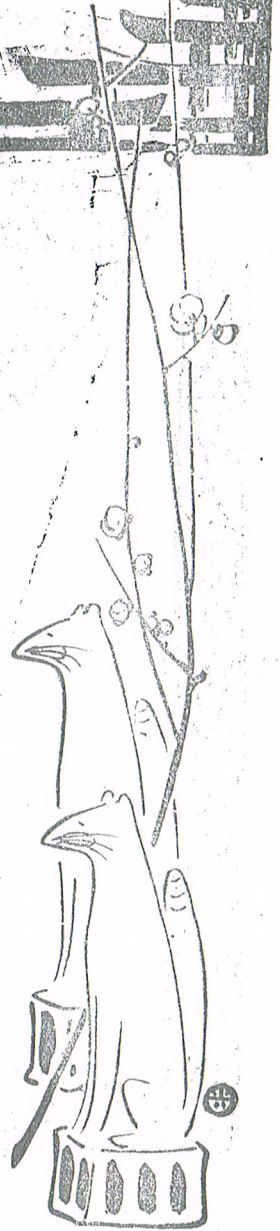


學文女少

少女五重のお菱

永代美知代



「はいお祖母様、お菱のおかちゃんよ。」

お雛様のお節句の朝、まあちやんが紅黄青白と、色取り美しう取合せた五重のお菱をお膳に載せて、隠居所のお祖母様の處へ持つて参りました。

「お菱だつて？」

「今日はお雛様のお節句ですもの、母様がお祖母様に召しあがれつて。」

「オヤさうかい、本當にさう云へばもうお節句かねえ、早いもんだ。」

お祖母様は何かしら考へ込んでお了ひなさる。

「焼いて來ませうか、ねえお祖母様。」

「何をね？」

此頃少々気がふれたやうにおなりなすつたお祖母様は、全くお菱の事なんぞ忘れて了つたやうな御様子で、その又とぼけたお顔と云つたらありません。

「アラお祖母様、召上りませんの、お菱？」

「はい、頂きますとも、折角のなんですもの、無遠慮に頂きますせう。」

お祖母様は馬鹿に叮嚀な御挨拶をなすつて

まあちやんが差上げたお菱を受取つて、手さぐりにおさぐりなさいました。お祖母様は此

二三ヶ月前頃から眼が見えなくなつたので、

何でも手でさぐつて、お菓子でもお魚でも、

ものゝ形を御覽になるのですした。

「はい、どうも奇麗に出來ました、母様

によろしく云つてお呉れ、お陰で今年も好い

お節句を致しますつてね。」



「本當にお祖母様のお叮嚀なこと！」

まあちやんが、下座敷へ焼きに降りますと

「お祖母様は召上つたかい」

茶の間で御用をなさりながら、母様が斯様

お聲をお掛けになりました。

「いゝえまだよ、だけどもね召上るから焼い

てお呉れつて、さう仰有いました。」

「左様かい、お祖母様は少しは焦げた位なの

がお好きだから、こんがり焼いておあげなさ

い、そしてよく氣をつけてね、おのどに塞る

と大變だから、小さく切つてお上げなさい。」

「え、大丈夫よ。」

こんがり焦して、小さくちぎつて、あべ川のやうにきな粉をまぶして、お祖母様の處へ持つて参りました。

「あ、おいしい事！」

お祖母様は大喜びで、まるで小供のやうな

いぢや又明日の朝
上手に焼いて差上
げませうねえ。」
とずん／＼お膳
を下座敷へ下げま
した。
それからまあち
やんは戸外に行つ
て、お友人を誘つ
て、御一緒に奇麗
に飾つたお雛壇の
前で、おまゝごと
をして遊ぶつもり
で歸つて来ますと
家ではお祖母様が
御大病だと云ふので、大騒ぎをして居る處でした。
まあちやんは驚ろいて了つて、もうおまゝ事處で



はありません。お友達に歸つて頂いて大急ぎで隠居
所へ駆けつけて見ますと、お祖母様は高枕で苦し相

お顔をなさいます。
「よかつたらまた焼いて参りませう。」
「さうかい、それぢやもう一ツ。」
お祖母様が、餘りお喜びなさるものだから、ま
あちやんはついで、うっかりすゝめて、幾らでもお
祖母様の召上る儘にやいて差上げました。お祖母
様は何時のまにか、五重のお菱をすつくり皆な召
上つて、
「あゝしかつたよ、それにお前さん
の焼方がお上手なんだもの、こんが
りと香ばしくつて、幾ら食べても些
少もあさないんだよ。」
こんな風なお世辭迄つかつて、ま
だ欲しさうな御様子で被在います。
併し流石にまあちやんも若しかし
て過ぎると悪いと思つたのですか
ら、わざとに氣がつかないやうなふ



りをして、
「焼き方がお上手だからつて、どうも有難うよ、そ

に、ウインウイン呻り通して、お顔の色つたら、血の氣のない眞蒼てした。

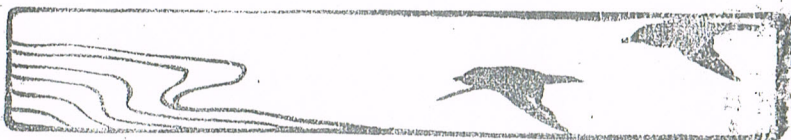
「お祖母様も心配さうに座つて被在いますつたんでせうねえ、甚く？」

「随分お苦しいやうな御様子なんだよ、先刻鎌田先生へさう云つてお迎ひにやつたから、今に來て下さるだらうがね、如何なすつたのか、何しろお年が年だから、心配でねえ。」

「母様は小さなお聲でお話なさいました。左様するうちにも、お祖母様は大層お苦しうで被在います。」

「如何なすつたんだらうねえ、今朝まであんなにお元氣だつたのに、急に斯様お悪くおなりなすつて、一體まあ如何した譯だらう。」

家の者は皆な誰も不思議に思つて心配して



居りますと、其處へお醫者様の鎌田先生が被入りました。そしてお祖母様のお脈搏をとつて見たり、お胸を撫でたりして被在いました

「ナニ御心配ありません。別に大した御病氣でもないやうですから、何かその、おかちんのやうなものでも過ぎたかと思はれますが、そんな風なものをおあげになりましたてせうか。」と訊きになりました。

「左様で御座います、今朝程實はお節句の御祝儀にお菱を焼いてあげましたが、小供にお給仕させまして、丁度どれ位頂きましたか解りませんか……ねえまあちやんやお祖母様は幾つ召上つたの、一つかい、それともいま半分も召上つて？」

「否、もつとよ母様、ね、五つ。」

まあちやんは鎌田先生が、おかちんの食べ

過ぎのやうだと仰有つたものですから、其時から、自分がお給仕したのに、無暗に澤山差上げて、悪かつたかしらと考へて居た處へ、今又母様から一つかい、それとも一つ半位かと訊かれて、全くいけな事をしたと後悔しましたけれど、まさかそれを譯にも行かず、正直に本當の事を云つて了ひました。

「オヤオヤ、五重皆な差上げたのかい、まあ本當に驚ろいて了ふよ、だからお祖母様が御病氣にもおなりなさる筈ですわ、小供つて本當に仕方のないものですねえ。」

「御免なさい。」

まあちやんは心から濟まない氣がして、泣き出しました。

「併しお祖母様もよく召上つたね、今度つから決して小供まかせにしないで、お前がよく注意しないぢや駄目だ、どうせお祖母様はあ



の通りもうろくして被入るし、小供の事なら呉れると仰有りや、幾らでも差上るに無理もなからうぢやないか、ねえまあちやん、心配しないでよろしい、お祖母様は今によくおなりなさるからね。」

「大丈夫、すぐに御全快です、只少し胃が悪

い位なんですからね。」

父様と鎌田先生と、二人に慰められて、まあちやんは幾らか安心しましたが、どうにも濟まない氣がして堪りません。お祖母様が餘り喜んでおいらに召上るもんだから、ついでに喜びなさるお顔が見たさに、何の考へもなく、あとからあとからと焼いて來ては差上げたのでした。

「先生、後生です、どうぞ早くよくなるやうに、好いお薬をあげて頂戴な。」

「よろしい、大丈夫、御心配は御無用です。」